

精神疾患言説の歴史社会学 「心の病」はなぜ流行するのか

すいぶん前の話である。るよつて、特定の障害や疾患がなぜ二時期流行して人口に膾炙し、いずれかの後も消えていくのかを論じたことである。ビネルの教えを受け、疾病論から司法精神病医学まで、表情学から音楽療法や病院設計まで、近代精神病医学全体の基礎を築いた、評者が敬愛する人物である。その刻苦的努力の甲斐もあって、晩年「フランス精神学の黄金時代」が現出し、「一八三八年法」が制定され、熱意のある精銳の精神科医を前提としたモデル精神病院建設を中心に行なわれ、精神病院は患者、溢れかえり、病氣を逆に慢性化させる装置のようにみなされるようになる。それを主要に広めたのが当時の新聞であったとされる。新聞はこうした記事を載せて発行部数をばしたと記されていた。

精神医療や精神疾患とメディア、とくに新聞との関連の誕生の時から切っても切れない関係にあるということが、ほとんど近代精神病医学は、日本近代以降の精神疾患をめぐる言説の盛りであり、その副題にあ

圧倒的な事実を丹念に提示

統計的数値を加えながらさまざまな変容を追跡

江 口 重 幸

女時代から近代に移行し、明治期に入つて以降今日までの間に「心の病」として流行したもの——神経衰弱(外傷性神経症を含む)、ノイローゼ、ヒステリーや、精神医療や精神疾患とメディア、とくに新聞との関連の誕生の時から切っても切れない関係にあるというこ

う。ある社会が秘かに形成する禁忌や境界、それを侵犯する欲望や解放。そこに動いているものが何なのか

り、「うつ病」——である。の、第二次世界大戦をはじめてした「精神疾患」はどういうにして「流行病」となったのか。これらをめぐる言説の生成と変容を、著者の佐藤は、「朝日新聞」と「讀賣新聞」の記事や読者投稿欄、時には広告欄までのページを開いても刺激で徹底して読み込むことで思わず読み入ってしまう。

さしこうしてたどった経過を、統計的な数値も加えながら追跡している。一般的の読者はもちろん、精神保健・医療関連職に就いている者が読んでも、例えば世紀初の「狂人譚」や「精神病院探訪記」、新聞の一面を飾つて取り上げられた吳秀三の精神医学講義、日露戦争時の敵将「神経衰弱」報道、その他予想外の多彩な内容に驚くだろう。精神医療をめぐる言説とメディアとの協働的ないし相反的な動きの連鎖が延々と続いているのである。

なかでも、第二章の明治期の狂気(発狂や逆上を含む)と神経病第三章(の帝国日本の)神経病と神経衰弱(ヒステリー)、第五章



A5判・518頁・5460円
新曜社
978-4-7885-1334-1

壁を経て、あるいは時代を過ぎてやっと触知されるも

のなのかもしない。

メディアと膺接して流行し衰退する「心の病」という切り口はたんに過去に向けられたものではない。今

うした要素の将来に向けた重要性を静かに指し示しているように思われる。（えぐち・しげゆき氏＝精神科医）

後のネット社会ではさらに複雑な流行現象として姿を現すことになる。著者はその「歴史社会学」という言葉に凝縮し、圧倒的な事実を丹念に提示した後で、こ

★さとう・まさひろ氏は小樽商科大学准教授・歴史社会学・医療社会学専攻。東京大学大学院人文社会系研究科修了。一九七九（昭和54）年生。